

慈濟 242

ものがたり

慈濟基金會
2017年2月

TZU CHI ● ツーチー



表見返し●

文・證嚴法師/訳・濟運/撮影・李白士

大愛が衆生を護る

己の心の無明を取り除き

苦難に喘ぐ衆生を救えば

大愛のエネルギーが集って

広くこの世の衆生を護ります





台中港区芸術センター。口で筆をくわえて描く画家周玉茹はここで初めて絵を描き始めた。助けを受けながら、人生をやり直すまで、ここで自信をつけ人生の方向を見出した。

(撮影・黄筱哲)

目次

【表見返し】
大愛が衆生を護る
済運／訳 1

【社論】
認知症介護の後ろ盾となる
慈願／訳 4

【世界の環境保全・ウェーデン】
無用の物を重用する
済運／訳 8

【主題報道・大林慈濟病院認知症地域ケア】

楽しい記憶に戻って
済運／訳 18

お母さん、僕です。
黒川章子／訳 36

友と共に老いる
済運／訳 42

【人生を描く】
嵐を越えて
田中亜依／訳 48

【證嚴法師のお論し】
慈悲善行に福が満ちる
世に智慧あり 代々徳を伝えよう
慈願／訳 66

【大地の守護者】
夢を継ぐ若者
心嫻／訳 78

【ボランティアスケッチ】
貢寮の娘 頼玉梅
済運／訳 90

【納履足跡】
最も尊敬のできる人
慈願／訳 102

慈濟大事記【十二、一月】
済運／訳 107

認知症介護の後ろ盾となる

台湾社会では高齢化がますます顕著になっている。戦後のベビーブームに生を受けた世代の人々は老年期に入り、それに加えての少子化により、高齢者の介護は国民にとって共通の課題となっている。中でも認知症介護は人性と社会福祉の底辺にある。

世界中どこでも六十五歳以上の高齢者の約一割が認知症の危険にさらされており、高齢者の認知症患者人口はそれに従って上昇している。高齢化が原因で起こる多くの疾病の中で、認知症は神経退化性疾病に属し、十年以上かけて死に向かう病である。

認知症は多くの家庭にとって重い負担となっている。仕事に追われる働き盛りの子供たちは、親を世話しなければならぬ責任を担っているが、病状の進行にどう対処すべきか。心ここにあらずの親。生活能力や記憶が衰え、日常生活も自分ではままならない親に振り回される疲労と悲しみは、大きな精神的ストレスになっている。

治療が不可能なら、医療は認知症患者と家族にどんな協力ができるだろうか？ 中西部の嘉義県は台湾でも高齢化指数が最も高く、介護資源は市と村では大きな差がある。

大林慈濟病院認知症介護センターでは四年前から嘉義の町や村に入って、認知症患者介護のネットワークを築き、介護の後ろ盾になるように努めてきた。

介護団体は診断や薬を提供して専門的な奉仕をし、また慈濟ではボランティア

イアの中から認知症識別ボランティアを育成して、地域に潜在する患者を見つけ出し、定期的に家庭訪問をして、その生活環境を理解している。同時に診察の効率化をはかるため、直接に総合医療看護と関係のある措置を取っている。

中華系民族の伝統的な考えでは、認知症は単なる老化であると誤解されているため、早期予防と治療が困難になっている。慈濟病院の認知症介護センターでは、政府と提携し「楽智学校」を設置している。ここでは毎週高齢者に学習指導を行っている。また、医学界と協力して、慈濟ボランティアは各地域で「記憶保養クラス」を開いている。これによって高齢者が社会性を高めることができ、また、地域でも年長者に対する関心を深めることができる。

また、家族集会を催して、医療チームが専門的なケア知識を家族にアドバイスし、家族は自分の経験を話し合って息抜きができる場になっている。そ

して最も身近な者が「見知らぬ人」になってしまった老病無常の無力感に苦しむ、家族にとって支持の力になっているのだ。

認知症介護施設の曹汝龍主任は、認知症と「失うこと」は共通していると言っている。患者が本来持っていた生活能力をどんどん失っていく一方で、チームは家族に協力して高齢者がまだ持っている能力を探し出している。そして患者がこの世界から去った後、残された家族にとって、愛と生命の尊厳を保って付き添った過程が、いつまでも深い思い出になって残るように願っている。

無用の物を重用する

スウェーデン式リサイクル（上）

スウェーデンでは子供の時から環境保全の教育が始まる。的確な資源のリサイクル観念は早くからスウェーデン人の心に植え付けられている。

スウェーデンでは九十パーセントの家庭ゴミが回収されている。これこそ名実共に永続の大国であり、産、官、学が合同で努力した結果、ゼロ化石燃料という美しい未来がすぐそこまで来ている。



(図) / Cecilia Lantz / Imagebank. sweden. se)

忙

忙しい市街地では車がひっきりなしに行き交い、会社勤めの人や自転車に乗った学生たちが規則正しく横断歩道を渡っているのが見える。バスが私の前を通っても、鼻につく排気ガスの臭いはしない。繁華街に身を置いていても、口を大きく開けて安心して新鮮な空気を吸うことができる。

ここストックホルムはスウェーデンの首都で、主に十四の島と一つの半島から成っており、七十以上の橋で繋がっている。町はバルティック海とマラーレン湖

に取り囲まれ、北のベニスとも称される水の都である。

二〇一〇年、ストックホルムはEUの第一回目グリーンシティに選ばれ、世界の都市で環境保全の模範となっているが、それにはそれなりの訳がある。公共交通機関を例にとると、市バスはほとんどメタンガスを燃料に使用しており、メタンガスは家庭から出る生ゴミや廃棄物から採取されている。そのほかのバスはバイオマスエネルギーを動力に使用している。このほか、縦横無尽に張り巡らされた自転車専用道路は市民の通勤や日常生活の交通手段として非常に利便性が高



(図/Sonia Sabe/Imagebank. sweden. se)

● 作業員がソーラーパネルを取りつけていた。ソーラーエネルギーは地区で最も重要な再生可能エネルギーである。
● ジャーワ地区のほとんどのアパートは屋上にソーラーパネルを設置している。(写真左)

い。また、車を買う場合は、政府が様々な優遇策を実施し、環境に優しい車の購入を促している。

公共交通機関のほか、もう一つ注目しているのは環境保全の取り組みは完璧な資源の回収であるが、それをアメとムチを使って推し進めている。アメとは、資源の回収奨励措置で、市民は空き瓶や空き缶を近くの商店で回収してもらい、商品に含まれていた瓶や缶の代金を受け取ることもできる。統計によれば、スウェーデン人一人当たりが回収する瓶や缶の数は百四十六個で、八十八パーセントの鉄やアルミ缶、ペットボトルが回収されて再

利用されている。そして、ムチは、所謂「ゴミ税」である。清掃員が市民の家庭ゴミ

を回収する時、秤で重量を測り、それを基準に毎月のゴミ税が課される。税金負担を減らすために、人々は自然とゴミを分類し、量を減らすようになる。

ストックホルムは国際的な大都市で、人口は多様化していて多い。都市の人口が増えるにつれて問題も増え、とくに環境に関する問題は頭が痛い。どうやって都市の発展と環境保全を両立させ、グリーンシティの名声を保つか、ストックホルムは引き続き難しい挑戦に立ち向かっている。

● 空気清浄機

空気も回収できる空気清浄機。排出される空気から熱エネルギーを取り出し、新鮮な空気が室内に入る時に熱エネルギーを同時に注入し、熱効率を上げている。



環境と経済の両立

整然と並んだ住宅ビルや区画整理された住宅街の道、緑豊かな公園の緑地や花壇の景色。これらはジャーワ地区が人に与える第一印象である。ジャーワは古い地区で、一九六五年から一九七五年にかけて、住宅不足を解消する目的で造られた。当時の建材は今ほど環境に配慮しておらず、住民は八十パーセントが移民で、失業率も高かった。

ストックホルム市政府はその町を二〇五〇年にはゼロ化石燃料の街とすることを決意した。市は「永続ジャーワ

できるようになる。

「ほとんどのアパートの屋上にはソーラーパネルが取りつけられ、電気とお湯を供給しています。そして、この煙突状のものは空気清浄機の排出口で、空気に含まれる熱を貯めることができます」。地域のエネルギーテクノロジーを担当するアニー・アーンストロームは、屋上で私たちにエコ設備を一つひとつ紹介した。

屋内に入ると、永続ジャーワプロジェクトによるエコ関係のアイデアが随所に見られた。例えば、公共の場や台所、浴室では省エネに役立つLEDが使われ、

プロジェクト」を始動させ、現地の古い住宅を建て替え、経済、社会、環境面で永続する町を建造しようとしている。

プロジェクトに参加する団体は多方面に渡っており、市、建設会社、地元住民団体などが参加して、討論を通じて少しずつ、住民が理想としている街を造ろうとしている。家屋の建て替えによって現地のエネルギー消費が五十パーセント下がったことが建設後に証明されている。省エネとCO₂削減のほか、永続ジャーワプロジェクトは再生可能エネルギーシステムを確立することで、当地区の建物が省エネだけでなく、エネルギーを供給

自動節水や節電の機能が蛇口や冷蔵庫についている。住居の窓は特殊な二重構造になっており、真空断熱の効果で外の冷気を遮断すると共に室内からは熱を逃さない。エコ生活は不便に思うかもしれないが、ジャーワ地区はその懸念を払拭している。毎日家庭で抑えられたエネルギー消費分量を累積すると膨大な数字になる。

リサイクルと省エネ、CO₂削減の目的が達成された。経済と社会面において永続ジャーワプロジェクトは実施可能な解決方法を提供している。

「永続ジャーワプロジェクトが園芸や

●徹底した省エネとCO2削減

* 屋根の断熱システムは熱を貯めると同時にCO2削減に役立っている。(写真左)

* (右下) 二重構造の窓は熱を逃さない。

* (左下) 浴室は節水する蛇口と節電に役立つLEDライトを使っている。



警備、清掃などの分野で多くの雇用機会を生み出しました。このアパートは全て賃貸で販売はしません。家賃は月額三千クローネ(約四万円)からです」と責任者のヘレン・ラーソンが言った。

住居と雇用の機会を提供するほか、住民がジャーワ地区が美しく思え、ジャーワ地区に対する貧民窟という印象を拭き去るためにも、計画的に広い緑地や色とりどりの花を植えた花壇を設置したのだ、とラーソンが付け加えた。また、住民に多様な生活機能を提供するため、屋外バスケットコートや屋内プール、スーパーマーケットなどの施設を設けたほ

か、子供たちが無料で通える学校もある。屋内に戻ると、アインストロームはもう一つ巧妙に設計されたあるものを紹介した。

「この壁に取り付けられているものは実はゴミ箱なのです。蓋を開ければ、家庭ゴミを入れることができます」と彼女はゴミを入れる動作をした。

その変わった装置の後ろには家庭ゴミを集めるための複雑なパイプが隠されている。その奇抜なシステムを提供している会社は、スウェーデンで有名な資源回収業者エンバックである。

(つづく)

楽しい記憶に戻って 楽しい記憶に戻って

◎文・楊舜斌 訳・済運 撮影・顔霖沼

80歳を過ぎた簡お婆さんは中度の認知症を患っており、いつも周囲の人や出来事を忘れてしまう。しかし、いくつかの記憶は体の細胞に刻み込まれたように、ある状況下で極自然に現れてくる。大林慈済病院認知症センターの社会福祉人員と臨床心理療法士の励ましで、お婆さんは古いミシンを引っ張り出してきて、かつて、数多くの学生を教えた裁縫の先生に戻ったように素早く生地を縫い合わせた。その日、お婆さんは作品を完成させることはできなかったが、それでも皆は希望を捨てず、取り戻した一瞬の記憶も残さなければならない。

台湾の六十五歳以上の人口中平均して十二人に一人が認知症に罹っている。八十歳になると五人に一人の割合となる。

認知症はこの高齢化社会で誰もが抱える課題である。

家に帰る道が分からない。家族の名前が出てこない。今日は何日か分からない……。

患者は記憶をなくし、家族は落胆する。

あなたは予防策と対処法の準備はできているだろうか？

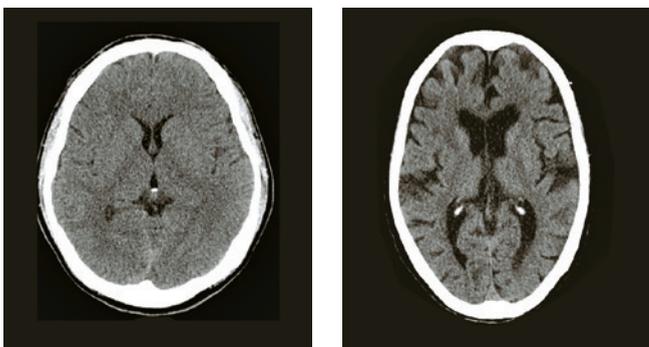
先程まで「このスープが好き。持って帰りたい」と騒いでいたのが、

次の瞬間、電車で隣に座った人に、「これは何？ 私はどうしてこんなものを持っているの？」と聞く。

記憶がつかえず短くなっている。家を出たり、車に乗るだけで記憶がなくなり、絵を見たり自分の名前を書き写すこともできなくなる。

幻想と物忘れが重複して訪れる 認知症患者家族の困惑

「時々私が仕事に出かけている時に、母はこっそり家で料理をします。一日に鍋三つ分も料理するのです。時にはそれを隠しておくので、腐ってから皆が気づくのです」。雲林県北港町に住む黄燕飛の母親は中度の認知症だが、外出したり人との会話を見るかぎり正常に見える。注意して観察しなければ、彼女が認知症を患っていることに気づくことは非常に難しい。問題を発見できるのは朝から晩まで一緒にいる家族だけである。



●左が正常な人の大脳で、右が認知症の人のものである。頭部のMRI画像で、認知症患者の脳が萎縮し、数多くの空洞ができていことが分かる。その空洞によって記憶が繋がらなくなり、果ては消失してしまう。(写真の提供・大林慈濟病院)

黄燕飛はある日、従弟から怒られた。「どうしておばさんにご飯を食べさせないのか？」と。話の一部始終を聞いて分かったが、母親は従弟に「三日も食べていないのよ。餓え死にしそう」と訴えたのだそうだ。

母親はもちろん食事をしているが、そのことをすっかり忘れていたのだ。いつも無制限に食べ続けるので、食後は仕方なく食べ物を隠すようにしている。また、母親が飼い犬に一日に二十回以上も餌を与え、三匹の犬は危うく食べ過ぎで死にそうになったこともあった。

母親が認知症になってからの変化と言

図である。

認知症候群は 世界で進行する一大問題

認知症はもう耳慣れない用語ではなく、多くの人が徘徊や時間を忘れるなどの症状について知っている。国際認知症協会（ADI）が発表した二〇一五年の報告によると、全世界の認知症患者の数は四千六百万人に達し、平均して三秒に一人の割合で増えている。ここから推測すると、二〇五〇年には一億三千万人に達する。

認知症

認知症は大きく退化性と血管性の2種類に分けることができる。退化性認知症はアルツハイマー症が最も多く、その主な原因は脳細胞に異常なタンパク質が溜まって海馬と前頭葉または側頭葉を侵し、正常な細胞が壊れてしまう。

血管性認知症は、脳卒中や慢性血管疾患によって脳内の血液循環不良が起き、脳細胞が死滅することで起こるものである。この場合、対処療法を取れば、比較的大きな改善余地がある。

双方の認知症の比率は6割と3割を占め、残りの1割は外傷や栄養失調、新陳代謝異常などの要因で起こる。

えば、何回も「お腹いっぱいになった？」と聞いたり、誰それが自分のへそくりを盗んだようだとかっさり言うので変だなど思っていた。しかし、よく考えてみると、それが事実でないことが分かる。やがて独り言を言うようになり、家族に対して悪態をつくようになった。

「泥棒が入るのを心配してあまり外に出ないのは、よかったです」。母親の幻想はひどかったが、少なくとも黄燕飛は認知症の母の徘徊を心配する必要はない。

この家庭の状況は特別なものではなく、世界中の認知症患者とその家族の縮

この数字は日本の人口または台湾の人口の五・六倍に匹敵する。それよりも心配なのは、治療が難しいことである。一九〇六年に発見されてから今日に至るまで、医学界では有効な薬を発見できないでいる。わずかに神経伝達を速める薬で初期の認知症患者の症状を目立たなくするだけで、本質的には症状は進行し続けていく。

認知症によって直接死に至ることはないが、患者の生活の質や免疫系統、運動能力など多方面で低下が見られ、間接的に死に至る。アメリカでは認知症の中で最も高い割合を占めているアルツハイマ

最高齢で、六十五歳以上の人口が県の総人口の十七パーセントを占め、全国平均を大きく上回っている。その次が雲林県であった。嘉義大林慈濟病院の統計によれば、病院を訪れる患者の四割が六十五歳以上の老人である。お年寄りが多いということは潜在的に認知症患者も多いということである。

二〇一一年、大林慈濟病院の神経内科主任になった曹汝龍は、診察に訪れた患者の多くが認知症のお年寄りで、そして、その多くが重い症状になってから来院し、家族もなす術を知らないことに気がついた。認知症と老化現象は異なる。認

一病を十大死亡要因の中の第六番目に挙げており、その危険性の高さが分かる。アルツハイマー病患者の平均余命は八年から十年である。どうやってその間に認知症の危険性を最低限に抑え、彼らに正常な生活能力を持たせ、発症を最後の半年に濃縮させるか、今でも全世界が努力している。

高齢化が急速に進む雲嘉地区 大林慈濟病院認知症センター設立

二〇一六年六月、内政部が発表した人口高齢化指数の統計によると、嘉義県が

知症は記憶力が低下するほかに認知機能や空間認知、運動機能、社交性の低下などがある。例にとると、老化はある物事を忘れても後で思い出すが、認知症の場合は自分が言ったことやしたことを完全に忘れてしまう。それ故、患者は他人の話が理解できなかったり、性格が変わったようになってしまう。

認知症の治療法はないが、早期に発見して健康保険内の薬を使えば、比較的質の良い生活ができるようになる。曹汝龍は雲嘉地区では認知症を正面から取り上げるべき問題だと感じ、二〇一二年九月、大林慈濟病院に認知症センターが設立さ



●大林慈濟病院認知症センター外来の曹汝龍主任（右）は患者のお年寄りと和らかに接する。患者と年齢が近い彼は、親身に患者と家族の問題に聞き入っていた。

れ、認知症専門の外来が設けられた。曹汝龍と個別案件管理療法士の劉秋滿、臨床心理療法士の許秋田が担当している。

地域社会で潜在的な認知症患者を捜し出して早期に治療するために、曹汝龍と許秋田はいつも地域で村長や町長を訪れ、自治体の協力を得て健康検査ができるよう働きかけている。

医療チームは慈濟ボランティアと密接

に協力して雲林、嘉義、台南、高雄などで「認知症ケアボランティア養成講座」を開き、「認知症簡易観察尺度 AD-8」を知って使えるよう指導している。それによって常時地域で判定活動を行うことで、早期に認知症患者を見つけ、適時に治療が受けられることに期待している。

曹汝龍が積極的に推し進めた結果、二〇一三年に嘉義県衛生局と共同でAD-8判定を各町村の総合検診の一項目に取り入れた。

曹汝龍によると、以前、認知症患者が家族に付き添われて病院を訪れていた時、外来から臨床心理療法士による認知

症の判定、MRIと血液検査の後、健康保険局で薬物使用資格が審査される。一通り終わるまでに数カ月を要し、病院に来る回数が五回を下らなかつたため、多くの症状がはっきりしない早期の認知症患者は病院に行くのを嫌がっていた。

この問題を解決するために、認知症センターはVIPが受けるような検査方法を取り、地域での検査と共に認知症患者に早期の発見と治療ができるようにした。

また、臨床心理療法士を第一線に置いて、地域での検査の時、ただちに異常と認められたお年寄りの判定ができるよう

●毎週木曜日の午後、認知症センター社会福祉人員の張益榕は家庭訪問を行っている。一度に2家族しか訪問しないが、長い時間を要することが多く、認知症患者の記憶が途切れ途切れなため、何度訪問しても、同じ会話が繰り返される。



にした。もし、認知機能に障害があると認められた場合は家庭訪問をして家族に理解を求めると同時に、認知症センターにさらなる検査の連絡をする。患者が病院を訪れた日にすぐMRIと血液検査を行い、二回目の来院には薬がもらえるようにし、医療現場で発生する煩雑な手順を大幅に短縮した。

薬物治療と同時に生活に付き添う

大林慈済病院認知症センターは患者の会と家族を支援する団体を設立した。医師や看護師、栄養士、物理療法士、社会

福祉課人員、ボランティアなどから成っている。

劉秋満は病棟の看護師だった。自分はお年寄りを世話した経験が豊富だと思っていたが、認知症患者ケアの仕事を始めて容易ではないことを知った。「寝ない時はどうしたらいいでしょうか？」と家族から質問された時、「昼間の睡眠が多過ぎるのではないですか？」と彼女は直感的に答えた。それが認知症の進行過程によるものであることを彼女は後で知ったが、このような「精神面の症状」が家族にとって最も困難である。

「方法としては、患者の昼間の活動量

を増やし、抗神経疾患の薬を投与するのです」。劉秋満は今は簡単に家族からの様々な問題に答えることができるようになった。しかし、親身になったり話を聞くことの方が大事だと彼女は言う。というのは、方法を教え、薬を投与しても、現実的に起きる状況に対しては病院が介入できるわけではなく、家族の辛さを聞いてあげることが一番良いのである。家族支援団体の活動を通して、認知症患者を抱える家族は互いにケアの仕方や経験を話して交流することで助け合い、不安を取り除くことができる。

家庭訪問も認知症センターの特色の一

つで、時間とコストを惜しまない重要なケアである。毎週木曜日が社会福祉部の張益榕の定期的な家庭訪問の日で、彼女は新しいケースと古いケースの二つの家庭を訪問することになっている。新しい方はこれからも治療をしていくのかどうかを確かめ、古い方は家での活動状況や生活上の困難を聞く。認知症のお年寄りの中には子供と同居していない人も少なくなく、外国人の介護士だけが付き添っているため、余計に社会福祉スタッフのケアが必要になる。

家庭訪問することで相手の本当に必要としていることが分かれると張益榕は言

う。ある日、中度認知症のお婆さんの家を訪れて会話をしていた時、お婆さんが昔は裁縫の名人だったことを知った。そして、話が進むうちに、お婆さんは彼女を客と思ひ込み、洋服を選び出した。彼女はお婆さんの言うがままに話を続け、人生で最も輝いていた時期を思い起こさせた。しかし、お婆さんが洋服のデザインを描こうとした時、描けなくなっていたことに気づき、その夢はそこで終わってしまったのだが。

「私は以前、この仕事をして何が見えてくるのだろう、お年寄りたちに希望はあるのだろうか」と疑問に思ったことがあ



●記憶保養クラスでは臨床心理療法士がお年寄りたちに知能テストして病状の判定を行う。

●認知症センターの社会福祉人員は時折、お年寄りたちの側に行き、孫娘のように甘えたりしてその反応を刺激する。

りました」。しかしやがて、患者の薄れてゆく記憶を止めることはできなくても、彼らを愛することはできると理解した。

病院から地域社会に入ること で予防ネットワークを築く

外来診察、患者の会、認知症センターの設立、地域での判定まで、今では家族

の参考になるよう、認知症に関するガイドラインを発行している。様々な段階の中で最も注目すべきは地域の「記憶保養クラス」の開設である。

二〇一四年七月、政府は長期ケアの問題を重視するようになり、衛生福祉部は全国に二十二カ所の認知症長期ケアの地域拠点を開設した。大林慈済病院認知症センターは数多くある病院の中で突出しており、唯一嘉義県の認証を得ている。溪口郷游東村に楽智学校を設け、週に二回、お年寄りの認知訓練と体力作りを行い、病状の進行を遅らせるための活動を提供している。皆の努力の下、設立され



て一年で最優秀拠点との評価を受けた。

認知症センターは続いて嘉義県民雄郷大崎村、三興村及び慈済台南佳里連絡処に「記憶保養クラス」を開設した。そして、二〇一五年十月、新たに梅山郷、慈済北港連絡処、佳里区漳洲里の三カ所にも拠点を開設し、溪口郷溪東村には「高齢者の健康な脳と長寿訓練クラス」を開設した。また、二〇一六年初めには高雄慈濟人医会の協力を得て、高雄静思堂と高雄楠梓区でクラスを開いた。現在、台湾全土に十の拠点がある。

各拠点に平均して二十数人の認知症患者が参加しており、合計で二百人以上が

参加している。多くの家族は困難を表に表して来なかったが、この数字は二百以上の家庭と繋がりができたことを意味している。黄燕飛の母親も後になって記憶保養クラスに参加したが、初めは騙し騙し参加させていたのが、今では楽しくクラスに参加している。母親に現れた最も大きな変化は笑顔が戻ったことで、家族も病状の進行をより理解するようになり、どんな状況に遭遇してもどうしてよいか混乱することもなくなった。あらかじめ心の準備をすることによって正しく対応できるようになったのだ。

転手がいることで、辺鄙な地域に家庭訪問に行つて帰る時の心配をする必要がなくなった。

「この十カ所の拠点をしっかり運営したいのです」。慈済国際災害支援のように、認知症センターと地域が協力して重点的、直接、尊重、そして永続の原則の下に、病院からの一方的なアイデアだけではなく、ボランティアと共に各拠点の特色を出していきたい、と曹汝龍は言った。そこが認知症家庭のシェルターになり、患者の症状が改善することで家族が安心し、笑顔が記憶に残る場所となることを期待している。

台湾の認知症老人のための連携したケアモデルの完成

大林慈済病院認知症チームはほぼ月曜日から土曜日まで休む間もないほど、地域を回っている。とくに高雄記憶保養クラスが開設された当初、曹汝龍と許秋田はボランティアへの講義のために、いつも疲れ切つて家に帰っていた。

幸い慈済基金会の支援で、認知症センターは二〇一六年新たに社会福祉人員、臨床心理療法士、看護師、事務員など五人を雇用し、着実に地域で運営できるようになった。中でも重要なのが専門の運

認知症の早期の兆候

- * 記憶力の減退が生活に影響を及ぼす
- * 物事の計画や問題の解決が困難になる
- * 以前は手慣れていた事務ができなくなる
- * 時間的、地理的感覚がなくなってくる
- * 視覚による映像と空間の関係が理解できなくなる
- * 言葉や文章による表現が難しくなる
- * 物の整理ができず、探し出す能力を失う
- * 判断力が衰えたり弱まる
- * 職場や社交活動から遠ざかるようになる
- * 情緒が不安定になったり、性格が変わる

インターネットから「認知症簡易観察尺度 AD-8」(注)による判定を自分で行うことができる。医者にかかる場合は「神経内科」もしくは「精神科」へ。

※注:「AD-8」のADはアルツハイマー型認知症の頭文字で、8は8つの日常生活における認知機能を意味している。

(資料・社団法人台湾認知症協会)

お母さん、僕です

あなたの息子ですよ

許棟樑 溪口樂智學堂學員家屬

母の老化は止まらない。もう目の前にいる人間が誰なのか分からない。叔父なのか、父なのかさえ。それは大変辛いことだ。しかし、母にとっては少なくとも悲しいことを思い出さなくてもよく、むしろ今を楽しく生きているのだと言える。

撰文・楊舜斌 訳・黒川章子 撮影・顔霖沼



●「迎えはまだ?」。母は学校のリュックを背負い、数分おきに許棟樑に尋ねる。送迎バスがくるまでこの質問を繰り返す。

朝起きて、許棟樑は静かに樂智学校の制服と鞆を母の部屋に届けた。今日は樂智学校の日だから送迎バスに乗るよと知らせたのだった。起きる時間なのに反応がないので直接声をかける。「もう八時だよ。出かけるんじゃないの?それとも家にいたいのか?」。そうすると母は素直に起きてきて、支度をして送迎バスを待つ。学校は大好きな場所だからである。

許棟樑の母は今年九十一歳である。認知症と診断されて六年、今では中度に進んでいる。母の病気に気がついたのは、弟が他界した後だった。急に母が許棟樑に対してよそよそしくなったようだ、と

家族が気がついたのである。物を盗られたといわれのない罪を人に着せたり、おかしなことを話すようになってきた。もともと優しい性格だったのがだんだん怒りっぽくなり、いつも誰かを責めて、バスの中で喧嘩をすることもあった。

「最初はただの老化だと思っていました」。許棟樑は母を連れて老人医学科へ診察に行き、老化防止だという薬をもらって数日飲ませた。すると足がむくれて大変なことになったので薬をやめた。その後ある親戚に「お母さんは認知症じゃないかな。神経内科に行つて診断してもらった方がいい」と言われたので、大林

慈済病院まで検査に訪れたのだった。その結果、やはり軽度の認知症と診察された。

余裕を持って老いていく

母の発病後、許棟樑は積極的に患者の会や関連講座に参加し、治療方法を探し求めた。しかし、知れば知るほど、母はもう状態が悪くなるだけだと気づかされるのだった。

試しに母を北部に連れてきて同居することにした。妻は分かってくれたが、母の方が慣れてくれなかった。見知らぬ土

い上、かんしゃくを起こされるので、どうしていいかわからない。心に苦しみを抱えるばかりである。時には耐えられずに母を叱ることさえあった。「私だって人間です。我慢できない時はあります」。それでも時間が経つに連れ、一通りのことを経験して心構えができるようになってきた。何かもめた時、以前ならこっちが家を飛び出していたが、それでは母は大声で怒るだけだと分かり、今では買い物に行くからと言って距離をとって、お互いに頭を冷やす。三十分後に帰ると、母はもう忘れていたといった具合に。

地で、部屋から出てトイレに行くにも迷うのである。三日後、彼はやはり母を実家に連れて帰ることにした。

母が一人で暮らすのは心配である。台北と雲林を数日ごとに往復する日が続いた。しかし、母の食生活は次第に不健康になっていった。栄養不良を引き起し、許棟樑は仕事をやめ、妻を台北に残して実家へ引越すことを決めたのだった。それから六年、最初は理解してくれなかった家族も、許棟樑の決定を受け入れるようになってくれた。

認知症の母と一緒に暮らすことは容易ではなかった。母の行動は予測ができな

要領よく手際よく

三年前、曹汝龍医師に勧められ、母を樂智学校へ参加させてみた。それ以来毎週二回の楽しみができた。彼も安心して母を学校に預けられるので、半日自分の時間ができた。時には一階で行われている家族支援団体の集まりに参加して、苦労話を聞いてもらったり、他の人の看護方法を学んだりすることもある。

実は母を連れ出すことは簡単ではなかった。母は字を習ったことがないが、年長者だという気持ちがあり、「学校」と聞いたとたん、「この年で何の学校に行

かなきゃならないの！」と怒って答えたのだった。

幸い、授業参加の第一日は敬老の日だったので、何かイベントがあつて、お小遣いがもらえるそうだよ、という口実ができた。お小遣いはもちろん、許棟梁自身が用意したものだ。

しかし、早く着き過ぎて、役所の人の挨拶が始まった頃にはもう十分しか座っていられず、帰りたいと騒ぐようになった。外の道路に出て行ってしまったので、仕方なく一緒に帰宅したのだった。こんな具合で第一日は失敗に終わった。

一回また一回と通い、お小遣いをもら



● 楽智学校のある日。講師は得意げに新しい教材の「バッティングマシン」を見せる。生徒たちの手と目の運動能力を訓練するのだ。母も励まされながらバッティングに挑戦。3回目でボールがマシンに当たり大成功。みんなは歓声をあげた。

える日なのだと思いついでいることもあれば、忘れていることもあったが、そういう目的は次第に薄れ、学校は楽しい所だという気持ちに変わっていったようだ。

しかし、母の老化は止まらない。目の前にいる人間が、許棟梁なのか、叔父なのか父なのか、分からなくなったのだ。それはとても辛いことだった。しかし試しに母に合わせて演技を試してみた。例えば、ある時突然亡くなった弟を思い出した時には、調子を合わせてこう答えたのだ。「そんなことないよ。弟は台北で仕事しているじゃないか。昨日帰って来た

だろ？ 会っただろ？」母を悲しませるような答え方はしたくないからだ。

「母に改善してほしいとは思っていません。ただ、学校には行きたいようなので、その半日を楽しく過ごしてくれれば十分です」と許棟梁は言う。母の認知症を理解してから、いろいろなことを受け入れられるようになった。病人なのだから、正常な人間と同じように考えるわけにはいかないのである。

いつでも母を第一に考えることはまるで子育てをしているようだが、許棟梁はそれも自分の生活の一部分なのだを心を落ち着かせ、寄り添うようにしている。

友と共に老いる

口述・曹汝龍（大林慈濟病院認知症センター主任）
編集・黄小娟 訳・済運

認知症は予防できるのですか？

A：長年、認知症患者とその家族に接して来た経験から言うと、60パーセントがアルツハイマー型です。アルツハイマー型は遺伝と大きく関わっており、食事と運動による予防効果はあまり期待できません。血管性認知症の場合、血圧、血糖値、コレステロールを抑え、タバコやアルコールなどの危険因子を控えることで予防することができません。一部の改善可能な認知症は、例えば、ビタミンB12の欠乏や甲

状腺機能の低下に起因するものは、その原因が特定できれば直ちに治療により回復が見込まれます。

菜食者はとくにビタミンB12の補充とバランスの取れた食事での認知症の発症を防ぐよう気をつけるべきです。

認知症になった場合、どう生活すればいいのでしょうか？

A：以前は薬を処方していましたが、それは認知症を抑えるものではなく、患者が自分で他の手段を身につける可能性を見つけさせるための補助的なものでした。

最も患者数が多いアルツハイマー型認知症は予防が難しく、治療することもできません。患者は平均で十年かけて病状が悪化しますが、記憶が困難になったり、同じ話や動作を繰り返したり、あるいは会話中の語彙が減少したりといった問題が出現します。時間の経過と共に

機能は衰え、少しずつ失われていきます。食事療法や運動ではそれらを補うことはできません。

従って、「失われた機能を回復すること」ではなく、「今ある機能を維持すること」に目を向け、後者に努めた方がいいでしょう。例えば、歩行が正常であれば、なるべく歩くようにし、表現力や記憶が弱まっているからといって家に閉じこもってはいけません。そして、楽器の演奏や歌、田植えなどできることは続け、発病する前より一層努力して機能維持を図るべきです。

もし、自立して日常生活ができず、誰かの手助けが必要な時は、家族に機能の衰えを話して支援を求めると共に、家族と共に維持している機能を刺激し、できない時は支援してもらおうのです。

認知症患者に言いたいのは、以前の自分や他人と比較せず、今の自分と比べましょうということです。例えば、二曲の歌しか歌えないとしたら、それを何回も歌って、歌う機能を維持するのです。

自分で自分のできることを見つけたり、身近な家族や友人の手を借りて気づかせてもらうこともできます。これだけは長く付き合っていない専門医療人員にはできないことです。そして、寝たきりになったとしても、機能が喪失していない部分があるはずで、できる限りポジティブな考え方で病を受け入れることです。

老後の心身状態に対してどう準備したらいいのですか？

A：一部の認知症患者は他人が自分の物を盗んだと思ひ込んだり、見境なしに人を罵ったりしますが、発病する前に「執着する」ことが多過ぎたのではないのでしょうか。もし、認知症になってからも品のある人であろうとするなら、若いうちから執着しないことを学び、心を穏やかに保つべきです。そうすれば、認知症になってからも毎日にこころして過ごすことができます。

老人と一緒に遊びましょう！

認知症の治療は、薬を使う治療法のほかに、非薬物療法も大切です。音楽療法、作業療法、回想療法、運動療法、アロマセラピー療法、認知療法などいろいろがあります。その中で、運動療法と認知療法は簡単な動作と道具で行うことができ、改善にとっても有効的です！

体の治療



❖ バドミントン投げる

筋肉の力を増強し、同時に視覚のバランスも訓練できる。
バドミントンの羽のほかに、プリスピーや柔らかいボールでもできます。

脳の治療



❖ ジェンガ

(木片を積み上げるゲーム)

お年寄りの精密動作とバランス感覚を訓練できる。

心の治療



❖ 園芸治療

花や野菜を育てることは、感情の安定や自発性の改善に役立ちます。

どんなに慌ただしい人生であっても、定年退職する前に何人かの「共に老いる」友人を作っておくべきです。それも車でせいぜい十分程度の目と鼻の先に住んでいることが望ましいのです。

同じような経験を持ち、生活状況も似通っている友人です。何か問題が起きた時は互いに世話したり、いつでも集まって雑談や運動することができ、それでいて、互いにプライバシーは護られているべきです。

週一回、一緒に食事する時、順番に家に行って料理したり、外食したりするのもいいでしょう。食事することで皆が集まって話が弾み、食べ物の話や感情の交流ができます。一緒に食事することは何よりも病気のためになります。

後日、認知症の症状が現れるにしても、友人たちの理解と包容力は、同居していない家族よりも役に立ち、これこそが最も良い予防と準備の方法なのです。

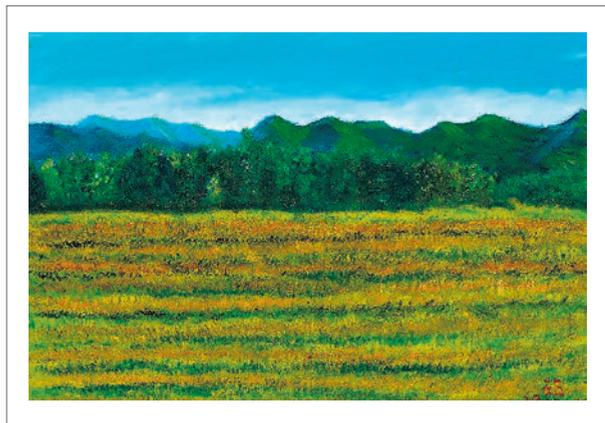
台中港区芸術センター。周玉茹はここで初めて絵を描き始めた。助けを受けながら、人生をやり直すまで、ここで自信をつけ人生の方向を見出した。



嵐を越えて

事故で負傷して以来、自由に出かけることができなくなった。風景を描くことでその失望を癒していった。

とりわけ樹木や草花は、どんなに強い雨風に打たれても生気に充ち溢れている。この大自然の姿が彼女の励みとなった。



◎文・黄玉桜 訳・済運 撮影・黄筱哲

「お父さん、私の絵が台中港区芸術センターに展示されることになったから、絶対見に来てよね！」

「わかった、わかった、見に行くよ。」

周玉茹は八十才近くになる父親を連れて、台中市清水にある台中港区芸術センターに展示された作品を鑑賞しに出かけた。広々とした展示場のなかで、父子は幸せなひとときに浸りながら、父親がついにこう言った。「とても良く描けているじゃないか。これから全力で描きなさい！」

二〇一五年、口で筆をくわえて描く画家、周玉茹の作品が台中港区芸術センター

ちに命の授業をしているのだ。

「どうして口や足で描く画家は風景画を描くのが好きなんだい？」と興味本位で聞いてくる人もいた。

「皆さんの愛のおかげで、私はここに来ました。とくに大自然の樹木や草花は、強い雨風に打たれても、生気に満ち溢れているでしょう。これも私の励みになったのです」と周玉茹は平然と答えた。

口に絵筆を含み、周玉茹は無我夢中で皆からの思いやりを繋げた美しい風景をキャンバスに描き出してゆく。

ーに展示された。そしてこの時、彼女は休日を利用して人通りのある広場で絵を描き始めた。美しい顔立ちと愛らしい笑顔、車椅子に座ってはいたが、そのモデルのような佇まいに多くの人が引き付けられ、足を止めた。

「お母さん、あの人はどうして口を使って絵を描いているの？ 顔はどう洗うの？ 歯磨きは？」

子供の不思議そうな眼差しに気づくと、周玉茹は筆を止めて、どう口を使うのかを見せ、力の入らない両手で、ゆっくりと絵具を開き、色を合わせて見せてあげる。このやり取りを通じて、子供た

父親の老いた姿

周玉茹は台中市清水区の純樸な田舎に生まれた。建築関係の仕事に就く父親は毎日朝早くから夜遅くまで雨風に打たれ、日に晒される中で働き、苦勞してお金を稼ぎ、子供六人を育てた。父親は違う分野を専攻していたが、専門的な設計図を描く能力がある。周玉茹は幼いころから知らぬ間にその影響を受け、設計図についてある程度理解していた。

高校卒業後、周玉茹は仕事を始めた。美しいスタイルと愛らしい顔つき、また活潑な性格で、彼女は同僚達のマドンナ

●2015年1月、総統府の中庭で児童歳末親睦会が開催され、周玉茹は招待を受けて絵を描いた子供が持ってきたスープが彼女の冷え切った両手を暖めた。(撮影/劉政旻)



となった。ほどなく、彼女は理想の白馬の王子と出会い、幸せな結婚生活を送ることになった。

しかし、その幸せは長くは続かなかった。夫は仕事でうまくいかないことがあると、癩癩を起こして彼女に暴力を振るった。清水の媽祖廟で手を上げられたこともあった。「百人以上の人が見ていましたが、助けてくれる人は一人もいませんでした……」。最終的には彼女の両親がその知らせを受け、すぐに病院へと連れて行った。

夫と別居後、周玉茹は仕事が落ち着いたら再び息子と一緒に生活しようと考え

ていたが、そう思い通りにはいかなかった。

一九九六年のある晩、仕事を終えてオートバイで帰宅する途中、路面のくぼみを避けようとした際にオートバイごと投げ出されてしまった。

「私は今どこ？ 助からないのかしら？」。病院の集中治療室で意識が朦朧とする中、父親と医師のやり取りらしきものを聞いた。「もしかすると寝たきりになり、呼吸器が一生手放せなくなるかもしれないません」

「仮に娘が半身不随になったとしても、私が面倒を見ます。お願いですから、どうか娘を救って下さい……」。父親は一

心不乱に医師に懇願していた。

周玉茹は泣くに泣けなかった。全身に管を繋がれ、その身体は大きな石に押し潰されたようだった。「どうしよう？ 息子を連れ戻せなくなるわ……。いったいどうしたらいいの？」

この不慮の事故が彼女の未来を奪い去っていった。身体の傷と心の苦しみは見えない鎖のように彼女の心を締めつけた。集中治療室では流動食を体が受けつけず、急性胃出血を起こした。まるでむごい方法で自分を痛めつけることでしょうか、神様の残酷な仕打ちに抗えないようだった。

その時期、父親は病床の傍らにラジオを置き、周玉茹が夜中に目を覚ますと、ラジオをつけてくれた。父親は娘のその美しい長い髪を切り落としてしまうことが惜しく、水を運んで髪を洗って、娘の美しい姿を守り続けた。

年老いた父親は、娘の看病のためにぐっすり眠れる日はめったになかった。ある晩、周玉茹は喉に痰がつまり、うまく呼吸ができなくなったが、疲れ果てて眠っている父親を起こす力もない。指を動かして病床の傍らにあるビニール袋を取ろうとし、その音で父親を起こそうとしたが、振り返って見ると、父親の髪はす

っかり真っ白になっていた。

周玉茹は驚いた。「お父さんがどんどん老けていつているわ。ここ数年私の婚姻と家庭のせいで苦勞をかけたばなしだった。それに半身不随の私の面倒をみるために、ゆっくり休めなかったのね……」

さまざまの心を信仰で落ち着かせる

リハビリは新たな苦痛の始まりだった。入院期間中、リハビリ科の医師とキリスト教徒の患者が気にかけて病室に来てくれた。

「周さんは何か信じていますか？」

「いいえ」。彼女は頭をふった。

この患者は周玉茹よりいくつか年上で、彼女にあらゆるリハビリの経験を教えてくれ、また彼女と一緒に聖書を読んでもくれた。「お祈りの力はとても大きいですよ。どんな困難に突き当たったとしても、神様に祈ることができるのです」。敬虔な祈りの声の中、周玉茹は暖かな力を感じ、さまよっていた心をしっかりと落ち着けることができた。

その後、キリスト教徒の友人たちは頻りに病室を訪れ、周玉茹のために祈り、物心両面で彼女をサポートした。彼らの

慈愛が、渴き切っていた彼女の心を潤し、周玉茹は安心して神様に自分を委ねられるようになっていた。

退院後、周玉茹は清水の実家に戻り休養した。娘が戻る前に、父親は家をバリアフリーに改装し、玄関から寝室、浴室に至るまで、娘の立場に立って考えつくしていた。

父親のゆるぎない愛があったからこそ、周玉茹は抛りどころを見つけ、新たな人生を歩み始めることができた。

「父も年を取ったし、癌も患っている。ここ数年、兄や姉が助けてくれているけれど、彼らにも自分の家庭があるし



●周玉茹は毎週日曜日に大慶教会で礼拝を行っている。彼女は人生の谷底に落ちた際に神様に出会った。牧師夫妻、兄弟姉妹の手助けのもと、暗闇から抜け出し、自らの人生経験を講演している。

……」。周玉茹は自立するための生活能力を必死になつて身につけ、父親の負担を減らそうとした。

「はじめは父も心配して、携帯電話を持つて外出するように言いました。時間をおいては何度も電話をかけてきて、私がどこにいるか確認してきました」。一人で買い物に行ったり、郵便局に行ったりするところから、教会での礼拝に至るまで、徐々に電動椅子に乗れるように

なり、清水の大通りや小路を自由に行き来できるようになった。

台中市清水区南社里教会の牧師夫妻や仲間たちの助けもあり、教会は彼女にとって第二の家となった。教会は事務の仕事を与えて彼女の収入を補うだけでなく、牧師夫人は教会のウェブサイトやポスターをデザインする機会を与えてくれた。数年にわたってデザインの経験を積み、絵を描く際の構図の基礎を固めた。

二〇一二年、桃園市脊髓損傷潜在能力開発センターがパソコン建築製図訓練課程を開設した。職業訓練局の審査を通過すれば、訓練受講生として仕事を紹介し

てもらうことができた。

周玉茹の健康状態は受講生の中で最も思わしくなく、父親でさえ彼女に期待していなかった。「私は二十年設計図を描いてきたが、この種の設計図は専門的で複雑な線ばかりだ。この状況でどうして描くことができる？」

周玉茹は父親のやり切れない思いを理解できたが、この仕事の機会を掴むため、彼女はためらうことなく家を離れ、遠く桃園にまで授業を受けに行った。

彼女の身体は長時間座ることができず、両手はいつもだるかった。日中パソコン室で設計を学び、夜宿舎に戻るとべ

ツドに横になり復習をした。彼女はいつも首で本を挟みながら読み、徹夜をしていたため、目覚めた途端、首筋が固まり全く動かなくなってしまうことがあった。しかし、身体が痛むからといって、退学を考えることはなかった。パソコンの先生は、より長い時間練習ができるようにとノートパソコンを貸してくれた。休日、同級生が遊びに出かける際も、彼女は宿舎に残り、両手に力が入らないことを補うように、パソコンを抱えて設計図を描いた。

資格試験で最も難しいことは、一定の時間内に設計図を完成しなければなら

院に入院して手術を受けた。やっとの思いで手にした建築設計の資格も、彼女に平穏な日常をもたらすことはなかった。

童総合病院耳鼻咽喉科の主治医である蔡青劭医師は敬虔なキリスト教徒だった。周玉茹の凝血機能が低いことを知ると、従来の手術では出血量が多くなるため、最新の低侵襲手術を受けるよう薦めた。もちろん手術費用は自己負担となるが、周玉茹の努力とその窮状を理解し、彼女は何も言わずにこの費用を負担し

●周玉茹は事故で負傷後、車椅子で行動することになった。通院や屋外での写生、講演活動に赴く場合など、リハビリバスのサポートが必要である。

いことだ。だが、たゆまぬ努力の末、周玉茹の描いた建築設計図はついに試験に合格した。修了式では大勢の喝采の中、パソコン建築設計3級の資格を手にした。

暖かな光に照らされて

資格取得後、周玉茹は桃園に留まり就業前の実習課程を受講し、台北の建設会社で働くつもりだった。しかし、北部のじめじめとした寒さが持病の副鼻腔炎の発作を招き、ひどい目眩に襲われた。そこで、彼女は清水へ戻り、沙鹿童総合病



た。

ある時、周玉茹が写生に出かけて車に乗り移ろうとした際、不注意で負傷し、大腿骨を骨折してしまった。術後、実家に戻り休養していたところ、病院のソーシャルワーカーが彼女に慈済台中支部を紹介した。

「必要ありません、彼らの助けは受け入れられません」。周玉茹の脳裏には十数年前に清水の媽祖廟前での苦しい記憶が浮かんだ。

「周さん、私たちは慈済の訪問ボランティアです。傷口はまだ痛みますか？」彼女が退院するや否や、青いシャツと白

っているのを感じた。大海原の船がそれに導かれるように、周玉茹も生きることへの希望と感謝の気持ちを持ち始めた。「どんな試練に直面しようとも、多くの人から愛を与えられているから、私は持ちこたえなければなりません。私も頑張っこの愛を伝えて、健康を大切にすよう、多くの人を励ましたいのです」

教会と脊髄損傷協会が周玉茹を講師に、学校や機関で生命の教育講座を企画し開催した。周玉茹が講座で話した人生経験は、学生や脊髄損傷患者の大きな励みとなった。

いズホンに身を包んだ慈済のボランティアが訪れた。ボランティアたちは、周玉茹の体がまだ痛むためエアーマットレスが必要なことを知ると、すぐにリサイクルの医療器材の中からちょうどよいマットレスを見つけ出し、家に運び入れた。何度かやり取りを重ねるうち、周玉茹も次第に慈済の人たちに心を許していった。彼女が最も感動したのは、「慈済の人々は私を助けてくれますが、改宗を強要しない」ことだった。

教会の兄弟姉妹や慈済ボランティアの温かなサポートのもと、彼女は執着心を手放し、無私の愛の灯台が自分の心に建

心の美しさ

命は学びの旅である。人生という名の台本において役柄ごとに異なる風采を体験することになる。周玉茹は決して順調ではない年月を経験したが、感謝の心で神様が与えてくれた自分の役柄を受け入れた。

二〇一四年、台湾夜合花姉妹創業就業協会が第一回脊髄損傷者「心愛美人」というミスコンテストを主催した。この活動は同じ脊髄損傷者を励ますこと、またこの活動を通じて企業に障がい者たちの努力を見てもらい、就業の機会とリソー



●慈済ボランティアの楊密は周玉茹にかわり、社会福祉サービスを申請して生活を安定させ、彼女が障がい者協会の口で描く画家課程に参加できるようサポートした。3年以上にわたり、母のように頻りに電話をしてきては心配し、自宅を訪問し、この愛が周玉茹を支え、前へ踏み出させた。

スを提供することを目的としていた。周玉茹は協会と教会仲間の応援と推薦を受け、この活動に申し込んだ。

「参加したくありませんでした。ただ静かな日々を送りたかったのです。彼女は唇を尖らせ、当時の複雑な心境を振り返ったが、やはり感謝の気持ちに溢れていた。

コンテストの活動期間、周玉茹は四十二名の障がい者たちと、専門の講師による作法と化粧の講座を受け、車椅子に座っている時の頭のとっぺんから爪先までの姿勢や手足の置き方、表情に至るまで指導を受けた。

「一番難しかったのは化粧です。眉毛を描き、アイシャドウを塗るのことに、とてつもない時間と体力を使わなければなりません。前回は化粧に一時間もかかったので、活動に参加する日はいつも早起しています」

皆の目に映る気品のある美しさは、周玉茹がその委縮した両手で時間をかけ描き出したものだった。美しい顔立ちと輝く眼差し、彼女の全身から放たれる自信で、第一回「心愛美人」コンテストの第三位を獲得した。

コンテストの訓練後、周玉茹はどんな場面でも、まるで蛹から孵った蝶のよう

な気品のある美しい姿を皆に印象づける。

「怪我をしてから絵を学びたいと思いましたが、家族には身体障がい者が良い作品を描けるものかと決めつけられました。まして絵を描いてどうやって生きていくのかと」。ずっと可愛がってくれた父親でさえ反対した。

「手で描き始めた時は、タッチを描き出せなかったので、口で筆を嚙んで描くことを試みましたが、頸椎に負担がかかり、少し苦労しました」。彼女の頸椎は損傷したので、ふつうの画架は彼女に適さない。多機能画架は機能的ではあった

間の経験を聞いたり、作品の模写から始め、徐々に思い描く風景を描きだし、周玉茹は一筆ずつ自分自身の作品を作り上げていった。

「先月、第一回脊髄損傷協会ミスコンテストの謝恩会に参加して、『感謝の道』という絵を描き、コンテストへ協賛してくださいました方たちへ感謝の意を表しました」

「あの絵の色使いは赤と黒の対比だけなんですけどね」。周玉茹は子供のよう

に笑ってこう言った。「あの絵を描いていた時、ちょうど台風が来ていたんです。それにたまたま看護師長が部屋の前を通

が、値段が高すぎた。慈済ボランティアの楊密は家計の苦しい周玉茹が画材を欲しがっていることを知ると、こう励ました。「絵を学びたいのなら、全力で取り組むべきです。私が一緒に店に行きますから、必要な道具を全て揃えましょう」

道具や顔料の提供だけでなく、楊密は周玉茹の父親と連絡を取り、娘の夢を応援するよう訴えた。

二〇一四年、油絵仲間の紹介で、周玉茹は台中脊髄損傷協会油絵教室に申し込んだ。指導講師であった阮麗英は道具の活用方法から、顔料の基本概念まで指導し、彼女に油絵を教えた。加えて油絵仲

りかかって、部屋に入ってきて絵を見て驚いて聞いてきたんです。『玉茹、台風を描いているの？ どうして黒と赤だけなの？』って」

「台風の中、絵を描いていた時、生きていると様々な雨風に遭遇するんだなと感じました。それに嵐が来る前には、空に真っ赤な雲が現れるんです。絵の中に描かれた道は、皆さんの愛があったからこそ、私は道を切り開くことができ、あの嵐のような日々をのり越えられたことを表現しています」

(慈済月刊六〇一期より)



【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・林淑女

慈悲善行に福が満ちる 世に智慧あり 代々徳を伝えよう

福を求めるよりも自ら造ろう

財を蓄えるよりも徳を蓄えよう

大地を保護する心でいれば

天災や人禍はなくなる

一年が去り新年を迎える時期にあたって、過ぎた日々が平安であったことに感謝し、謙虚な心をもって未来の日々を迎えなくてはなりません。毎年変わ

らない私の願いは、人心の浄化、社会の平穩、天下に災難のないようにという三つの念願です。唯一世の中が平安になることが人々の幸福です。

慈濟ツイヂは勤勞、儉約、克難をモットーとした「竹筒歲月」から始まって以来、半世紀にわたって一筋に歩いてまいりました。少ない人数から堂々たる隊伍に成長した慈善の足並みは、今では世界九十カ国以上に及んでいます。その精神と理念は変わらず、内に「誠正信実」、外には「喜捨」を修めてまいりました。

奉仕を発心立願したからには、さま

さまざまな試練に遭っても初心を忘れてはなりません。「誠」の心をもって衆生済度を誓い、「正」の心をもって煩惱を断つ。「信」の心をもって法門を学ぶことを誓って、「実」心で仏の道へ行きます。地に足を着け着実に奉仕し、いかなる苦勞にも怨みも悔いもなく、見返りを求めない奉仕は安心自在です。

これが「大慈に悔いのない無量の愛、大悲に怨みのない無量の願、大喜に憂いのない無量の樂、喜捨しても求めない無量の恩」ということです。

ちつぽけな善と軽く見てはなりません。人々の善が集まると「一粒の米も

一俵に、一滴の水も大河になる」と言われるように、この愛の力は一人だけを助けるのではなく、家庭全体に及んでいます。それだけでなく社会全体と天下の衆生に関心を寄せることができず。日々人を愛おしみ、助け、衆生と好い縁を結んでこそ幸せな自分になります。

環境保全センターでは多くのお年寄りが活潑に体を動かして、心では常に良いことを念じ、財産は子孫に残さずに大地を護って、子々孫々に至るまで健康な大地であるようにと模範を示しています。この人たちは幸せを求める

のではなく、幸せになるように智慧を用い努めているのです。老いても価値のある人生です。

新しい年の一日一日を大切に、そして慈悲智慧を心に、光明に向かって正しい方向へと前進しますよう願っています。

無明煩惱をなくして

慧命の記憶を培い

道心を護って

情熱を傾けよう

この度の歳末祝賀会では各地で「薬

師如来十二願」というお経を題材にした手話ミュージカルを演じていました。人心に生じる無明はさまざまな苦しみのもとになっています。「衆生は無明によって重大な苦に染まっている」と薬師如来はおっしゃっています。「病を治す志」の十二大願は人心の無明を取り除く妙薬になっています。

昨年十一月から今年の一月中旬にかけて行なわれた歳末祝賀会が一月十四日をもって一段落しました。私は精舎へ帰る途中、いくつかの連絡所へ寄りました。各連絡所は寒空にもかかわらず熱気に溢れ、冬季配付の準備に

追われていました。厨房から漂う良い香りは、年越しの料理の匂いでしょうか。

今年は全台湾の慈済会所が一斉に盛大な冬季配付活動を行い、二万五千人の長期ケア家庭の人々を招待して、年越しのご馳走をふるまっていました。その日はお年玉を配るだけでなく施療と散髪を行い、また舞台では劇を披露して、皆が温かい新年を迎えられるように願っていました。

愛のこもった暖流は凍てついた世の中を温かくします。愛と善は台湾の宝です。この愛と善が台湾で永遠に続きます。

切にして、精進し奉仕することができます。

法を聴いて心に刻み込むだけでなく、信を奉行し、仏陀の甘露妙薬を用いて煩惱無明をなくす以外に法を伝えなくてはなりません。法を聴き、法を説くことは己の慧命を培います。人と広く法縁を結んで衆生を護ることで、法を聴いて法を伝え、心のすべてに法があつてこそ、心の根が強固になつて無明の風に吹き倒されません。

生命の長短は何人もはかり知ることができませんが、広く深く掌握することができません。来世は煩惱縁、それと

よう願っています。

人々は善の心を持っていますが、善行の心念も護らねばなりません。心にある善の種をいつも法水で潤せば荒れ放題にならず、今生に植えた福の種が愛を發揮して奉仕すれば、生々世々にわたつて福に恵まれます。

この世の菩薩になりたいと志すなら、四弘誓願を立てることです。衆生を濟度し、煩惱を断ち、法門に学び、仏道を行う四弘誓願を立て、人々の中へ入つていかねばなりません。また、生老病死苦がいつどこから現れるのか、それを理解していると、自身の幸せを大

も法縁でしょうか？ それは今世であるあなたがどうあるかによります。丁寧に善の種をまいて、絶えず法水の滋養を与えて慧命を潤し、愛の力を積み重ねると、来世で法を聴くことができます。菩薩道を歩み続けることができます。

順境にも無常観がある

逆境には因縁観がある

人生を善用し

価値を創造しよう

「薬師経」の中で、人間が病苦相に尽きるのは生まれながらの四肢健全、心

身の健康ではありません。健全な身体を授かったなら常に感謝だけでなく、人に尽くすことです。この身を善くして自他を利することこそが、価値のある命というものです。

桃園静思堂の歳末祝賀会の席上で、ボランティアが「薬師十二大願、終曲」を演じていました。その中で肺線癌のステージ四と診断されている林永全さんも参加していました。彼は自分が病気が知りつつも意気消沈せず、夫婦で励まし合ってこの日演じきりました。なんと素晴らしいことでしょう。そして、治療に協力して積極的に自分の人

生の計画を立て、残りの時間を善くして慧命を伸ばしていました。

彼の心に法があつたため、人生の法則である免れることのできない生老病死を理解することができました。順境には無常観があり、逆境には因縁観があります。治療の過程で気力が奇跡を創造することを信じてボランティア活動に参加し、身を以てほかの癌患者を励ましていました。

桃園ボランティアの謝佳成さんは腹部大動脈解離により大量に出血し、一万CC以上の輸血を受けて辛うじて一命を取り止めました。集中治療室か

ら一般病棟に移っても、大勢の法の仲間が付き添っているのを見た隣のベッドの人は、謝佳成さんがとても偉い人なのだろうと思っていました。謝佳成さんは、私はとるにたらないボランティアに過ぎないと言っていますが、法の仲間からすると彼はかけがえのない法の仲間です。

謝佳成さんは常日頃奉仕して人生を無駄に過ごしていません。ですから重病の時には多くの法の仲間が献血への協力を申し出、そばに付き添いました。血縁は一生一世のものに過ぎませんが、法の仲間との縁は生々世々にわたりま

す。この生涯で縁のある導師、同道、同志は互いに善知識を把握して菩提の大道で共に福縁を造りましょう。

真に命を大切にすることとは、その体を大切にすることのみでなく、人としての身を善くし、時を把握して人々を利してこそ、人生において役に立つ人となることができます。台中慈濟病院が開業してから十年になります。二〇〇二年に開業した時に、わが師、印順導師の開示を頂きました。「慈濟人が種々の智慧を以て衆生を利し、さらに多くの人に仏法の利益をもたらしているのは、仏教においての基本精神の発

場である」と、導師は大変喜ばれておられました。

導師が慈済人が細やかな心で奉仕をしているのを認めてくださったことに、私は深く感謝しております。五十一年前に設立された慈済は慈善志業を始めました。その六年目に設立された貧民施療所は、現在展開されている医療志業の始まりです。この道を歩み初めてから四十五年になりました。今では六カ所の病院で皆が協力し合って、人々の健康を護っています。

ある患者が心臓大動脈解離と心タンポナーデ合併症を患って緊急に台中慈

済病院へ送られてきた時は、心肺停止の状態でしたが、それでも医療スタッフは熱心にこの患者を鬼門から救い出しました。その後、患者は心臓外科医

の余栄敏主任に感謝の手紙を送りましたが、余栄敏主任は「手術の成功は私一人だけの力でなく、病院のスタッフが一致団結したからこそ為しえたもの。とくに慈済ボランティアの細やかなサポートのおかげです」と言いました。

お互いに感謝することは最も美しい。病院全体が尽力して重症患者の命を護っていることは感謝に耐えません。仏法の中に「観身不浄」という言葉が出

てきます。それは身体は皮に包まれた

臭い物ということ。医療スタッフが毎日その身を護っているのは大変な苦勞ですが、堅い慈悲の心で人々の生命を護っていることは感動と感謝に耐えません。

この世の苦しみで病に勝るものはありません。病の中にある恐れは計り知れません。患者とその家族が悲嘆にくれている時、医療スタッフが抜苦与楽に尽くすことが最も必要です。病人が健康になって元の生活に戻り、家族もろとも平安に包まれた時の喜びは実に無量の功德です。

素食は慈悲の心を培う
善の念は悪を浄化する
福の凝集に
人々は安らかになれる

今年のヨーロッパは異常な寒さに襲われ、六十人以上が亡くなりました。中でもシリア難民は国境を越えて寒さ厳しいバルカン半島の難民テントで暮らしています。その苦しみはいかばかりでしょうか。

かの国では少数の人の心が不調であるために、長年にわたって国家は動乱し、人々は故郷を追われ、流浪の憂き

目に遭っています。こんな時、人心の浄化が必要です。自分の心身を護るだけでなく、社会の人々の身と心を護らなければなりません。心と大地を護ってこそ天災と人禍が少なくなります。

極端な気候変動によって災難が続発していることは、人類の生活様式と密接な関係があります。慈悲は長年にわたって、気候変動枠組み条約締約国会議に要請を受けて参加してきました。各国とも開発が減少していることが分かり、省エネによる二酸化炭素排出の知識と認識もあるものの、ただ行動が不足しているということでした。環境

保全の行動を人々が習慣とすることは、実はそれほど困難なことではありません。最も有効な方法は素食をすることです。

統計によると、世界では一秒に千七百七十匹の家畜が殺され、一日では一億五千匹に上っています。こんな大量の家畜を養うのに必要な飲水と飼料は驚くほどの量で、家畜の排泄物に含まれる大量のメタンガスは地球温暖化を加速させています。

素食は大量の汚染物と消耗を減らさせ、また慈悲の心を培うことができます。人類は食への欲求を満足させるた

め、動物を狭い空間で飼育して自由を奪い、一旦伝染病が発生すると大規模な殺処分を行います。なんと残酷で悲しいことでしょうか。

現在のこの世は仏陀がおっしゃった五濁悪世にあたります。戦争、疫病、気候異常などはその実、人心の貪瞋癡慢疑の五濁にあたり、人々が目覚めなくてはならない時です。善念は五濁や人心を浄化させます。慈悲をもって不殺生を実行すれば、この地球は健康になり、動物たちも何の恐れもなく自由自在に生きることができます。

善と悪は綱引きをしているようなも

のです。もしも人々の心が善に向かえば和やかになり、共に善行造福を行えば天災人禍は減少します。

皆さんの精進を願っています。



大地の
守護者

夢を継ぐ若者

◆台北市・陳揚慈

二十歳ちよつとの陳揚慈さんは、生まれも育ちも台北近郊の自然豊かな陽明山です。活力にあふれ活潑な揚慈さんは、山登りをしたり辺鄙な地域へボランティアに行くのが好きです。二〇一六年、夏休みを利用して徒歩で台湾一周を達成しました。アウトドアが好きな反面、揚慈さんはまた正真正銘の環境保全ボランティアでもあるのです。

Tシャツに黒のズボン、頭には野球帽をかぶり、軍手をはめて、といった姿が環境保全ボランティアの基本装備です。

お父さんと回収車のトラックで出かけようとすると、捨て





られていたのを拾ってきて、茶葉蛋（茶葉と煮込んだゆで卵）、大耳朵（大きな耳）というおどけた名前をつけられた二匹の犬といつものように遊んでから、トラックに乗って行くのです。揚慈さんは生まれつき心の優しい女の子です。生きとし生けるものを大事にするだけでなく、小さい時から肉食を好まず、素食をしたいと親にお願いしました。大きくなってからは、家畜を飼育するには莫大な資源が消費され、環境にも負担をかけることを知りました。それが、揚慈さんが素食を貫く固い決心にもつながり、そして、周りの友達

に素食を勧めるようにもなりました。

「勉強のほかに、一番やりたいことのひとつが、『環境保全』です」と彼女は言います。若いものにもかかわらず慈悲心でこの大地を愛し、命を尊重するとの思いは同世代の人よりずっと優れていたと思います。

やつと見つかった後継者

揚慈さんの祖母は慈濟ボランティアで、家族の中で一番早く環境保全に目を向けた人でもありました。祖父をはじめ両親も祖母の影響を受けて資源回収に加わったのです。揚慈さんは二〜三歳のときから祖母に連れられて環境保全の活動に参加してきました。中学生になっても、学校が終わると、両親は回収物を満載した車で彼女を迎えに行った後、環境保全拠点へ直行します。親子は一緒に当日回収してきた物を分類、処理し終えてから帰宅することがしばしばでした。ですから、揚慈さんにとって、環境保全とは、家風でした。祖母から受け継いできて、すでに日課とし

て生活の一部になっていたのです。

二〇一四年八月、揚慈さんは運転免許証を取得しました。お父さんのように、一日も早く三・五トンの回収トラックが運転できるようにと願っていました。それは、長年にわたって重い回収物を運んだりして、腰や背中に痛みなどの症状が出てきたお父さんのことを心配していたからです。もしトラックが運転できたら、お父さんの代わりにハンドルを握るだけではなく、回収物の運搬作業も手助けできれば、お父さんの休み時間が増える、と優しい揚慈さんは考えるのでした。

学校がある期間中も、休みの日やちよつと時間がある時は、必ず環境保全拠点に行きます。たとえ夜、学校から帰って来たばかりの時も、陽明山にある文化大学付近の夜間回収拠点に手伝いに行きます。

娘の熱心さを見てきた父親は、「この大事な環境保全の後継者として期待できそうだなあ!」と言って、嬉しそうな安堵した顔を見せました。



年長者が行いを以て子どもを育む

揚慈さんは大家族の中で育ちました。今ではとても珍しく三世帯が一緒に住んでいます。住宅も昔の三合院建築（台湾の昔の伝統的な建物）で、「正身」と呼ばれる母屋が今でも残っています。古風な屋根やレンガのたたずまいが、この家族がいかに伝統を守っているかを示しています。家族は大勢ですが、和気藹々と互いに助け合いながら生活しています。小さい時からそのような環境の中で育てられ、おのずと長幼の序や人として守り行うべき道徳を身につけていったのです。



よう。

揚慈さんは、家事は言うまでもなく、炊事や子守り、また簡単な修理や、電球交換なども全てこなせるのです。地域の環境保全の仲間たちは、「明るく思いやりがある」と、揚慈さんのことを褒め称えます。それに礼儀正しく、年長者が重い荷物を持つているのを見ると、すぐ手を差し伸べてあげます。揚慈さんが自発的にボランティアの行列に入り、年長者に優しく配慮するのは、実に祖父母や両親の影響によると言えましょう。まさに彼女自身が言うように、「年長者の教えは私の心に刻まれている」のです。

揚慈さんと両親の関係はまるで友達のように和やかで、時々冗談も交えて話し合っている様子を取材している私たちも見ました。「家内には感謝しています。子どもが小さい時から、朝食は家で食べることを堅く守ってきました。増えた親子の時間を大切にして、親が寛大な心で子どもを包容し、話に耳を傾けてあげれば、大きくなって自然と親に親近感を抱くでしょう」と、お父さんは言いました。家庭教育が子どもの人格形成にいかに重要であるか分かりました。両親が知恵を働かせて

子どもを育てあげたからこそ、今の揚慈さんがあるのです。

人生の方向

青春まつ盛りの揚慈さんは、タレントを追っかけたり、化粧品や買物に興味を持つたりもせず、その代わりに、大地や自然、そして社会問題に関心を持っています。大学の四年目に入ると大部分の学生は、卒業即失業かもしれないという不安に直面します。ですが、揚慈さんは、「有意義に人生を送りたい」と自分の願望を話します。

ひよつとすると、彼女は山登りをしたり徒歩で台湾を一周したり、ボランティアに参加したりといったプロセスによって、自分の価値を知ろうとしていたのかもしれない。そして結局自分が一番好きなのは、やはり環境保全の仕事だと気づきました。外出の際に箸や弁当箱などのマイ食器を持参するだけでなく、周りの人にも素食するよう熱心に勧めます。また「将来ゴミを生み出すような仕事に就いては

ならない」とも考えてもいるようです。

大量の回収物の中には、想像を絶するような汚ないものが含まれていたり、異臭がしたりします。それなのに、一人の若い女性がどのようにしてそのような悪条件を克服して、やり続けてきたのでしょうか。

「環境保全はゴミ収集のように認識されていましたが、私はそんなに汚いものとは感じていないのです。人間が作り出した廃棄物ですから、自分が捨てたゴミをまた自分の手で処分するようなものです。将来もし両親がしなくなっても私は続けてゆく決意を守ります。『環境保全ボランティア』は、私の人生の道程において、大切なエネルギーの源であるかもしれませんね！」と、揚慈さんはしっかりとした口調で語りました。



【ポラントイアスケッチ】

貢寮の娘、頼玉梅

いつも静かな貢寮は頼玉梅の故郷である。
彼女は誰も知らない山間部の事実を耳に傾ける。

◎文・李委煌 訳・済運 撮影・黄筱哲

貢寮と聞けば、ふつうの人は建設が中止となった第四原子力発電所や、毎年行われる国際海洋音楽祭を思い浮かべるだろう。台湾の東北端に位置する貢寮は、面積が新北市の五パーセントを占めるが人口はわずか三パーセントである。人が



てきばきとした頼玉梅は20数年
間、故郷の貢寮で慈済のケア世帯を
世話して来た。紺色のシャツに白の
パンツ姿のポラントイアが白い雲を
浮かべた青空の下を行くのは、現地
の弱者家庭にとって見慣れた親しみ
深い風景である。

┃訪問ボランティア 頼玉梅┃

1953年生まれ。1994年、慈濟委員の認証取得

訪問ボランティア歴：24年

訪問時の心得：弱者家庭を訪問するに当たって、「私たちがでなければならない」と気負って人助けをするのではなく、心して付き添い、成果を気にしないことである。様々な人生に深く関われば関わるほど定められたそれぞれの道があることが分かる。

で中学校に進学した。

多くの村人は文盲で、頼玉梅は時折、彼らが親しい人に出す手紙の代筆をしたり、扶助会の帳簿を見てあげたりした。ある時、村人が服毒自殺を図って遠くの病院に送られたが、医者は電話で回り回って頼玉梅を探し当て、その人が服用した薬物の名称を見てきて欲しいと彼女に頼んだことがある。しかし、薬の瓶に書かれてあったのは彼女にも分からない英語だった。「大きくなったら、村人の手伝いをしたいと思いました」

後に彼女は慈濟訪問ボランティアになり、二十数年間、貢寮で弱者家庭の世話

まばらな広い土地は都会の人にとっては雑踏から離れるのに格好の場所だが、北部海浜道路が開通する前は交通が非常に不便な所だった。貢寮で生まれ育った慈濟ボランティアの頼玉梅が学校に勤めていた時、そこに配属された同僚の一人が夜中にいなくなってしまうことがあった。「ここは静かすぎてとても住めない」。これが外部の人から見た貢寮である。

六十四歳の頼玉梅の故郷は貢寮龍崗村で、伝統的なしきたりが残る村である。末っ子の彼女は小学校を卒業する時、進学すると言い張り、母親は根負けして進学させた。彼女は当時の村で唯一女の子

をすることで、少女時代の思いを実践している。

表面的なことはしない

二十数年前、頼玉梅が初めて花蓮の慈濟病院で医療ボランティアをした時、若くて彫の深い美しい顔立ちの先住民を世話した。片親の家庭で育った青年は服毒自殺を図った。「こんなにハンサムで、五体満足なのに、どうして自殺なんかしようと思ったのだろう？」と平凡な人生を送って来た頼玉梅は不思議に思った。

翌日病室を訪れてみると、青年はとて

も元気だったので、彼女は一安心した。しかし、三日目に突然死んでしまったのだ。「その時、私はとても悲しみました。人生というものが分かりませんでした」

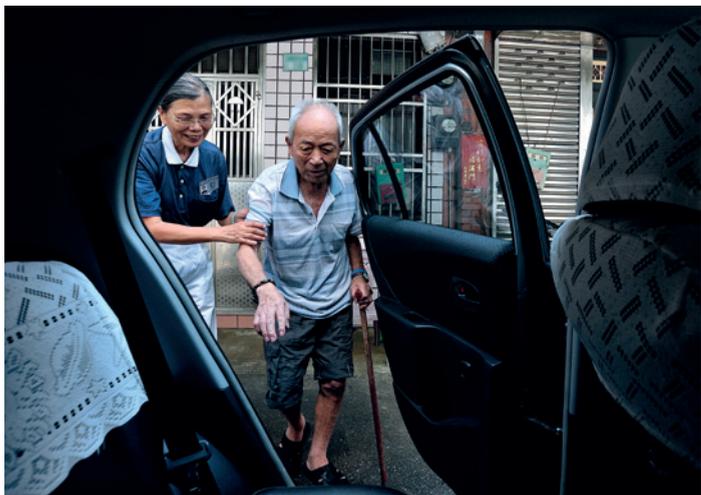
その衝撃的な経験から、外側は立派で明るく振るまっけていても、内心には誰にも言えない苦しみが鬱積しているかもしれない、と頼玉梅は理解するようになった。その時から彼女は、本当に人助けするのなら、積極的に相手の話を聞いて観察し、背後で苦しみを作った原因を理解する必要があることが分かった。

初めての医療ボランティア経験がこの二十年間の人助けに役立ち、弱者家庭を

訪問する時に一層気を遣い、相手の身になって問題点を見い出そうとするようになった。

人助けの道は平坦なものではなく、彼女はいつも貧しい人や病人、独居老人または堪え難い環境と接し、必要な限り付き添っている。その多くが貢寮の人たちである。

初めのうちは頼玉梅も汚さと臭いに慣れなかったが、何度も経験するうちに「捨て身」になることができ、次第に何とも思わなくなった。それが一歩進んで、そういう奉仕が人生の責任であり、使命であると思うようになった、と彼女は言う。



いつでも困難に立ち向かえる

冷たい雨の降りしきる冬でも、三十五度を超える灼熱の夏でも、頼玉梅はボランティアと一緒に毎月、貢寮の貧困家庭を訪問する。中には十数年間も訪問を続けている家庭もある。

貢寮では祖父母が孫を育てている家庭が少なくない。「若い世代は遠くで働い

●頼玉梅の片目は重度の近視。慎重にケア世帯の名簿と施療資料を読んでから、外から来たボランティアを各村の弱者家庭に連れて行ったり、行動の不自由なお年寄りを施療に連れてゆく。

●阿澤は右目が失明し、血液透析を受けて長いが、働いてお金を稼げないことに自責を感じている。頼玉梅は彼の健康状態を見守り励ます一方、長年、彼の世話をしている妻と三人の子供を励ますことも忘れない。

ていて、子供の世話ができないので、貢寮で祖父母が面倒を見ているのです」。お年寄りたちが健康であれば、まだ世話できるが、生活教育の面では簡単にはいかない。持病があっても自分の面倒を見てくれる人がいないお年寄りもいる。

長年、血液の透析をしている阿澤は右目が失明していて、左目も弱視で、重度

身障者手帳を持っている。ボランティアは彼の健康状態に留意しサポートしている。子供の学費は政府が援助しているほか、足りない分は慈済が支援しているので、気にかけないよう励ましている。阿澤のように長年社会福祉の世話になっている家庭では、子供の教育こそが一家の希望であることをボランティアは知っている。

頼玉梅が長期的に訪問しているのは二十世帯ほどあり、各世帯異なった状況にある。定期的な生活補助のほか、ボランティアは毎月訪問を終えた後、補助金の調整や家屋の修理が必要かどうかなど



について意見交換を行う。

医療を送り届ける

新北市貢寮区の人口はわずか一万三千人で、統計によると若い人が外部に流れるため、六十五歳以上の人が二十パーセントに達している。この地域の高齢化現象は「超高齢社会」の規準に達しており、それが医療問題にも顕著に現れている。貢寮澳底保健所では、頼玉梅がよく知っている眼科の蔡医師が月に一度診察するだけで、漢方医もない。辺鄙な地域は医療資源に乏しく、交通も不便で、お

年寄りの多くがバスや誰かの車で保健所に行っている。大病院に行く時は、基隆でも台北でももつと時間がかかる。二〇一四年末に基福公路ができ、基隆の病院に行く時間が大幅に短縮された。

北区慈済人医会の医師や看護師、薬剤師たちがボランティアで定期的に貢寮を訪れて村人の施療を行うようになってから十五年になる。貢寮区は広域で、住宅は密集せず散らばっている。もし、医療を必要としている村民がいれば、あらかじめ現地のボランティアが準備する必要がある。毎回の活動では、事前にピラを配布して村民を招き、施療の場所や往診

から通う生徒が下校するのに合わせて、彼女も毎日午後三時半に帰る準備をしていた。ある同僚が独身の彼女に、「他に何かしてみたら？」と慈済の募金集めを勧めた。

一九九二年、頼玉梅は慈済のお茶会を開き、慈済委員に講演してもらった。当時、彼女は婦女会の常任監事をしていて、宗教に興味のある友人を数人招待した。

●弱者家庭の訪問や査定、補助、付き添いなど、あらゆる段階で団体の智慧と力が必要である。貢寮地区は社会福祉と医療資源が不足しているため、慈済ボランティアは幾つもの地区が協力して村人の世話をしている。

の経路などを計画している。

「招待しないとお年寄りたちはあまり来ませんから。仕事したり家にいることが多いのです」。お年寄りはい僕でなければ医者にかからない。体の調子が悪ければ薬を買って飲み、目がかすめば目薬を差して済ますのを頼玉梅はよく知っている。それゆえ、彼女は自発的に送迎車を出して、村民の健康を護っている。

世話してくれる隣人

頼玉梅は二十歳の時、貢寮中学校に勤めていた。澳底、福隆、龍洞、馬崗など



その日はとても暑かったが、澳底小学校の会場にはクーラーがなく、二百人ほどの来場者は皆、汗びっしょりで参加した。しかし、催しが終わった後、多くの人がこぞって慈済の会員になった。

その年に頼玉梅は、台北から来た先輩の訪問ボランティアと一緒に、本格的に貧寮での貧困者ケアを始めた。それら弱者家庭の場所を熟知するために、彼女は仕事帰りや休日に車であちこち回った。時には番地が少し違うだけで遠く離れていたたり、一つ向こうの山の頂にある場合もあった。辺鄙な吉林山や双溪の一番奥にある泰平村などでは滅多に人に出会う

いる。ある時、数人と一緒に歩いていたら、足の長い彼女は気がつくくと、友人たちから遠く離れていたことがある。

田舎の人らしい純朴で人と争わず控えめな性格は彼女の仕事ぶりにも現れている。せっかちで責任感が強く、いつも仕事をさっさと片付けようとす。しかし、職場での昇格を考えて仕事をするのではない。二十数年間のボランティアもそういう心構えでやってきた。

六十歳を過ぎた頼玉梅は独身で、学校を退職してからは経済面でのストレスも家庭の悩みもない。自分の人生は平凡で大したことはないが、訪問ケアの過程で、

ことはなく、道を尋ねようにも人っ子一人いない。例えいたとして、教えてくれない。目的地に辿り着ける保証はない。彼女は社会から遠く離れた地域があることを知り、もっと関心を持つべきだとつくづく感じた。

積極的になるにも縁が必要

細い体の頼玉梅は風にも吹き飛ばされそうに見える。性格は神経質で注意深く、仕事の動作が速いので、誰も彼女の右目が千二百度の近視だとは気がつかない。彼女は一人で生活することに慣れて

弱者家庭の様々な状況や経済的な悩み、長年の病による心身の疲弊などを見てきたことで、彼女は見解と悟りを無限に広めたと思っている。生活は平凡でもいいが、人生は「愛」がある故に非凡なものになった。

(慈済月刊六〇〇期より)

最も尊敬のできる人

豊かな愛の心で、喜んで人助けをする、これが真の心豊かな尊敬のできる人

無量の愛を捧げれば
無量の福を受けられる

◎文・釋徳侃／訳・慈願
昨年始めの台南地震で、多くの幸せな家庭が一瞬にして地震と共に崩れました。倒壊した維冠金龍マンションに

住んでいた洪さんは、十二時間も崩れた瓦礫の中に閉じ込められて重傷を負い、一時は心肺停止の状態でした。九カ月に及ぶ入院中に二十回以上の手術を受け、両足を切断されましたが、この度やっと成功大学院を退院することができました。

台南での歳末祝賀会の席上で、證嚴法師は地震の中で生き延びた生命の勇士たちについて話されました。その中で洪さんが家族や友人に励まされ、ついに心を開いて生を求め、勇敢に未来に向かっていくことに触れ、「人生は無常です。今日一日健康で平穩無事に過ごせたことに感謝し、社会のために尽くさなければなりません。無事に過ごしている人は苦難の人たちを思いやり、愛の力を結集して、湧き出る泉のように愛を絶やさないことです」と話されました。

周黄秋香は貧しい家庭に育ちましたが、夫婦が共に努力した結果、事業が成功して楽しく暮らしています。今では、社会奉



仕や環境保全ボランティアをして、地域の人々を誘い導いています。法師は彼女の善行を称えられ、経典の中に述べられている布施の功德について説明されました。

迦施延尊者カセニネンは、貧しい老婆を見て心に喜びを覚えました。その人に布施をする能力はありません。尊者は托鉢の鉢を老婆にわたして、これで水を汲んでくるようにと言いました。老婆は喜んで水を汲むとうやうやく尊者に供養をしました。そして尊者の説法を聴いた後、その夜安らかに大往生を遂げたのです。それだけでなく、敬虔な布施の功德によって亡くなった後、天上で天女に生まれ変わりました。

「心の豊かな人はこの世の極楽にいるようです。善行奉仕を心得ている人がこの世の菩薩です」と、法師は皆にわずかなことと軽く見ず、一粒の米が俵となり、一滴の水が大河となつて流れるように、わずかなことでも天下の善事を成し遂げることが

できるとお教えになりました。人々が社会の隅々にまで愛を以て奉仕し、愛の力が満遍なく注がれるように願っておられます。

まず苦しみを解いた後に

説法を行う

台南の委員慈誠座談会の席上で、法師は「無縁大慈、同体大悲」の心を持ち、縁を把握して苦難にいる人を助けるようにと言われました。そして、「貧富、職業、社会の地位の別なく、人々の愛も平等です。心をこめて喜んで人を助ける人は、心の豊かな人です」とおっしゃいました。

法師は各地の慈済人が長い間、忍耐強く苦難の人に寄り添い、その人たちが自立するまで見守っていることについて、「人を救うだけでなく、心も救うのです。苦しみが解決した後、法を説



き聞かせなければなりません。苦難の人の心に善の種を植えつ
け、未来の因縁に萌芽して成長するようにしなければなりません
」とお教えになりました。

遠く長い菩薩道を、法師は皆が堅い道心と忍耐力を持ち、生々
世々にわたって絶えず法を聴き、学び、群衆の中に入って、衆
生と善縁を結び、見返りを求めずにやり遂げるなら、必ずや仏
心に到達することができると思います。

慈濟大事記
2016十二月
2017一月

訳・済運

1
2
・
2
4

慈濟ヨルダン施療配付チームの一行36人は医療志業の林俊龍執行
長を先頭に、24日から31日までマフラグ省ザタリ難民キャンプ周
辺のキャンプ、アズラク難民キャンプ、シリア難民学校及びヨルダン
河バレー地域で施療と配付活動を行うと共に、マフラグとアンマンで

1 2・3 0	台中慈濟病院の医療人員は慈濟ボランティアに従って、公園や廟、商店前の歩道でホームレスを見舞い、食糧と防寒衣類、湿布などの物資を配付すると共に、健康状態を調べた。
1 2・3 1	インドネシアのタンジュンバライカリムン慈濟ボランティアは初めてカリムン島刑務所で配付活動を行い、420人の受刑者に日用品を配付した。
1 2・2 8	フィリピンのケソン市ピンヤハン貧民地区で27日、大火事が発生し、約500世帯が被災した。慈濟ボランティアは28日、被災地近くに奉仕拠点を設け、炊き出しと医療奉仕を行った。連日の雨の中、被災者に生活必需品を配付した。

1 2・2 6	フィリピン、ザンボアンガ市カミノヌーボー地区で25日、大火事が発生し、約300世帯が被災した。慈濟ボランティアはその晩に見舞い、26日に衣類や食糧、日用品などを298世帯に配付した。
1 2・2 5	◎10月、カンボジアのスルーチ省は連日の大雨で洪水が発生した。慈濟カンボジア支部と現地のカンボジア青年団は協力して、同省のコンピサイ県とソロントン県で合計2836世帯に米を配付した。 ◎香港九龍地区の慈濟ボランティアはホームレスに対するケア活動の一環として25日、牛頭角常盛樓で忘年会を催し、25日と26日の2日間にわたって、觀塘埠頭、油尖旺歩道橋下及び地下通路で食糧と防寒衣類の配付を行った。
	末祝福会を催した。

01・21			食のネット署名に参加し地球の温暖化を遅らせよう」と推奨した。署名は毎年新たに統計されるが、2016年1月12日から2017年1月11日まで314778人が署名した。
01・11			「2016年慈濟認証式及び歳末祝福感恩会」は、台湾全土で2016年11月3日から2017年1月21日まで證嚴法師の主催により54回行われ、4824人の新委員の認証を行った。合計で約11万人が参加した。
01・21			花蓮慈濟病院は國璽幹細胞法人と幹細胞医療の分野で協力することで合意書を取り交わした。「自らの体脂肪幹細胞を脳に移植して行う潜在的脳血栓の治療」の第一期人体試験に関する研究計画を受託した。

01・11			慈濟基金会は「111世界菜食デー」運動に呼应し、大衆に「1日菜
01・07			台中慈濟病院で10周年記念行事が行われ、同僚約100人とほかの5つの慈濟病院の院長たちが合同で「薬師如来十二大願」を公演し、患者も参加して医療人員の病に対する初心を表現した。
01・05			◎花蓮慈濟病院の林欣榮院長は国際的な医学誌「CELL TRANSPLANTATION」の編集長に就任し、この日、花蓮慈濟病院で雑誌編集部設立式典が行われた。 ◎マレーシアのケランタン州で大雨による洪水が発生し、北部マレーシア慈濟ボランティアは5日、災害支援活動を展開し、パサーマス県とトゥンパット県で食糧と日用品を配付した。

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600
花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和
平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88
号
TEL: 886-4-36060666
FAX: 886-4-36021123
慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301
FAX: 886-3-8563604
台北支部
106 台北市忠孝東路三段 217 巷
7 弄 35 号
TEL: 886-2-27760111
FAX: 886-2-27761244
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ
総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885
カナダ
TEL: 1-604-2667699
メキシコ
TEL: 1-760-7688998
ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972
ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091
イギリス
TEL: 44-20-88699864
フランス
TEL: 33-1-45860312
ドイツ Hamburg
TEL: 49-40-336806
オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511
スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883
オーストリア Vienna
TEL: 43-1-7346988
南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365
香港
TEL: 852-28937166

フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3
ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001
マレーシア Penang
TEL: 604-2281013
ミャンマー Yangon
TEL: 95-1-541494
マレーシア Penang
TEL: 604-2281013
シンガポール
TEL: 65-65829958
インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889
ブルネイ
Kuala Belait
TEL/FAX: 673-3336779
ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305
トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802
オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666
ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

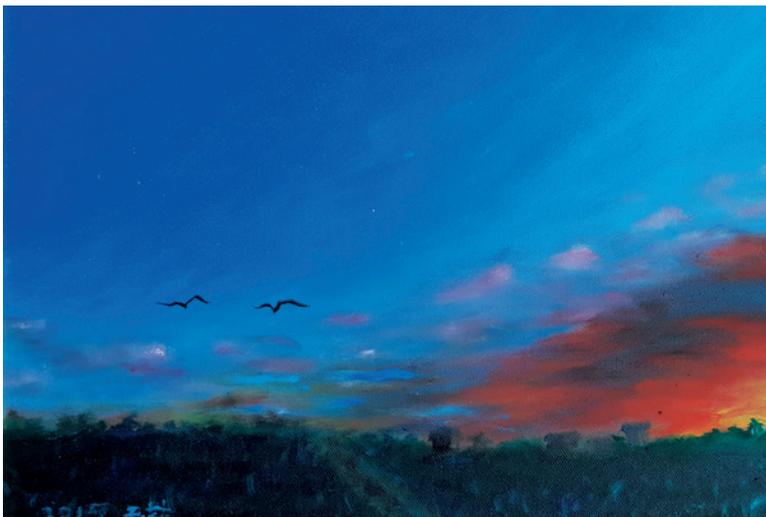
慈済

2017年2月20日発行・242号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴
発行所 慈済基金会
〒112 台湾台北市北投区立德路2号
編集 慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・張涵
校閲 山田智美
電話 (886)02-2898-9000
FAX (886)02-2898-9920
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部
〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16
電話 (03)3203-5651 ~ 5653
FAX (03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただけますれば幸いです。(日文組編集同人)



故郷の黄昏 台中港

私の面倒を見てくれていた父は、体調を崩してしまいました。家族に経済的な負担をかけないためにも、我は愛する清水の台中港を離れ、台中市の介護施設に入所しました。やり切れない気持ちで、最後に見た台中港の黄昏を描きました。

私が表現したかったのは悲しさだけではなく、絵の中の赤とピンクの色は、皆さんからの愛と私への期待を表しており、絵の中の鳥は私です。羽を広げて高く舞い上がり、遥か彼方へと飛び立ち、新たな未来を切り開こうとしています。（油絵・周玉茹）

